INTERNATIONAL & INFORMATION STUDIES

新潟国際情報大学

[本校]〒950-2292 新潟市西区みずき野3-1-1
tel. 025-239-3111 fax. 025-239-3690
[新潟中央キャンパス]〒951-8068 新潟市中央区上大川前通7-1169
tel. 025-227-7111 fax. 025-227-7117
http://www.nuis.ac.jp somu@nuis.ac.jp

平成22年1月1日 発行

Vol.45

学報
国際・情報

学長 平山 征夫

「夢」を描きなおす年に

学生諸君、教職員そして父母の皆さん、新年おめでとうございます。新しい年をどんな気持ちでお迎えでしょうか。政治や経済、各方面で変化の多かった昨年でしたが、私にとりましては、景気の悪さから卒業生の就職内定率が例年になく低いまま年を越してしまったことが気がかりなまま迎えた新年です。

一昨年から続いている世界的景気悪化は、サブプライムローン等によるバブルがはじけたためですが、そうしたバブル的経済社会の仕組みをつくってきたことの反省と同時に、背景にある資本主義の行き詰まりをどう見直すのか、大きな課題だけに関心を持ちつつ心を引き締めて新年を迎えています。それが世界やわが国経済全体に及ぼす影響にとどまらず、デフレ経済を伴って個々人の所得・地域格差を拡大させています。新卒者の就職戦線にも引き続き深刻な影響を与えるだろうと危惧しています。

少し暗い年明けの挨拶になってしまいましたが、それだけに新年を機にそれぞれが今年にかける夢を描き直すことが大切です。そしてその夢を実現可能な活動目標につくり変え、今年一年の生活プランをつくりあげてください。目標を持って生きることは、精神的豊かさを与えてくれますから…。

本学にとっての「夢」は何でしょう?本学を目指して入学してくる若者に、教育を通じてそれぞれが人生の夢を実現できるよう知識を身に付け、思考力を高めるようお手伝いすること、人材育成だけでなく大学自体の持っている財産と活動を通じて地域の発展に貢献すること、などではないかと考えています。

昨年、学長として「改革元年」を掲げて大学の改革に取り組み始めました。大学としての「夢」の実現のためです。「将来検討チーム(略称)」を中心に将来の大学の学部・学科のあり方などについて検討を重ねてきました。3月末を目途に一定の検討結果をまとめ、理事長に提出する予定です。皆さまからも積極的なご意見を頂きたいと思います。

目標を持って「森」を育てよう

もうひとつ、昨年「キリットチーム」による学内環境の改善活動も行いました。「あいさつ運動」から学生の休憩場所の増設、敷地内禁煙化、教室の授業設備の改善、非常勤講師室の改良と印刷室の分離など行いました。JRの通学ダイヤの改善、学内支払いのカード化、中央キャンパスの活用等は解決方法や結論を得られませんでした。今後とも学内の環境(教育・勉学・執務環境)改善に取り組みますので、どしどし問題提起をしてください。

「環境」そのものについても、目標を持った活動を実践したいと思いながら手付かずでいます。学内で環境にやさしい活動はやるべきことがあるはずです。目標を決め、教職員・学生一体となって取り組みたいと思っています。私の大学での夢のひとつは、いつか皆で毎年木を植えて、ここに「みずきの森」を育てたいということです。「今年その第一歩が踏み出せればなぁ」と夢見ています。

CONTENTS

2・3面
JENESYSの高校生と交流
「研究生」制度と体験報告
教員の海外研修報告ーカリフォルニア大

最終講義のご案内
「ビジネスメッセ」「科学の祭典」に出展

4・5面
厳しい状況下「就活」本番に備え
企業懇談会を開催・235社参加
卒論中間発表会を終えて

平成22年度入試日程ご案内
湧源(編集後記に代えて)

6・7面
私の研究テーマ
現代GPシンポジウムを開催
お薦めBOOK

教員の活動(2009年下半期)

8面
手塚漫画の魅力を語る
ー連携公開講座で長男・眞氏が講演
新潟空港で警備と接客(卒業生の便り)
「紅翔祭」を終えて(実行委員会長の報告)

JENESYSの高校生と交流

本学で最後日程を楽しむ

アジア・オセアニア地域７カ国20人の高校生と２人の引率教員が12月14日、財団法人エイ・エフ・エス日本協会（AFS）東アジア青少年交流計画（JENESYS）プログラムの一環で、昨年に引き続いて本学を訪れました。

本校みずき野キャンパスを訪れた一行は、まず国際交流センターへ。平山学長らが出迎え歓迎しました。また、ガイド役の6人の本学学生ボランティアが自己紹介を行い、一行を学内の施設見学に案内しました。その後は、情報文化学科１年のCEP（コミュニケーションを目的とした英語のクラス）の授業に参加し、英語による交流を１時間にわたって行いました。

昼食は学食を楽しんでもらいました。学生ボランティアたちと一緒に食事を取りながら交流し、2週間滞在した日本で最後のプログラムを終了しました。一行はこの後に東京へ向かい、帰国の途につきました。

互いに刺激、理解深める

情報文化学科3年　乙川　匡

2週間のプログラムで日本を訪れているJENESYSの留学生を迎え、私を含め6人のスタッフで約20人の留学生をキャンパスに案内し、昼食を一緒に食べるなどして彼らと交流することができた。

留学生たちは、昨年度に比べて日本語を理解する学生が多かったというのが率直な感想だ。世界中の人々が日本の文化や言語に興味を持ち、それらに触れ、学んでいるということはとても喜ばしい。そんな彼らを見て、私もさらに各国のことについて知りたいと思うようになった。

また留学生たちはCEPのクラスで、日本の学生とディスカッションすることで刺激を受けていたようだった。参加した本学の学生たちも、世界の国々から日本に来ている留学生と楽しくコミュニケーションすることができた。

今回のJENESYSの留学生の訪問は多くの学生に刺激を与え、私にとっても非常に貴重な経験となった。来年も是非訪問していただけたらと思う。普段の生活で「世界」を意識することはほとんどないが、それは漠然とものすごく広いもので、とても遠くにあるものであると感じてしまっている。しかし、今回のような経験で世界をより身近に感じることができた。

私たちには海外の方々と接する機会というのはそう多くはないが、私はこのような素晴らしい異文化交流ができる環境づくりに励んでいきたいと思う。私たちがJENESYSの留学生のように異文化に目を向けていけたら、さらにお互いの理解が深まるだろうと思う。

本学の「研究生」制度

より専門的な勉強のために

本学には、「研究生」という制度があります。主に社会人の方が、研究テーマをもって、本学教員の専門的な指導を受けたい場合、研究生として入学する制度です。

これまでに、本学卒業生が進学や留学の準備としての勉強を行うために在籍したり、一般の方が、自分ひとりでの勉強の限界を超えるため、あるいは、会社の仕事のために、当該専門分野の本学教員の指導を受けることを目的として在籍されたりしています。

今回、職場で情報システムに携わることになった、本学卒業生（平成17年３月卒）の松園香さんから、研究生としての在学期間を終了するにあたって寄稿していただきましたので、ご紹介いたします。

なお、本学研究生の入学時期、在学期間、入学資格及び手続きなどは、本学学務課（025-239-3111(代)）に直接お問い合わせください。

半年間の在籍を終了して

松園　香

新潟県国民健康保険団体連合会に勤務して5年目になりました。勤務してからの4年間は、審査課に在籍していましたが、5年目の4月から情報管理課に異動になりました。審査課は医療機関から毎月提出されるレセプトを審査するのが主な業務で、情報管理課は審査支払のシステムを主に担当しています。その異動がきっかけで4月から9月までの半年間、国際情報大学の研究生としてお世話になることになりました。大学を卒業してからしばらくたつので、在学中に学んだ知識を少しでも思い出すため、また新しい知識を身に付けるために研究生として大学に通いました。

「国民健康保険団体連合会をモデルとしたシステム分析の研究」をテーマに竹並輝之教授にご指導いただき、半年間ではありましたが多くのことを学ぶことができました。

新しい知識、選択肢が増えた

半年間で3つの講義を聴講させていただきましたが、学生時代とはまた違った意識で講義を聴講することができたと思います。学生時代はただ漠然と講義を聴き、時間が過ぎていましたが、研究生としてもう一度大学に通い、ほかの学生と一緒に席に座ってみると講義を受ける気持ち、意識が大きく変化したように感じました。

竹並教授には、『情報システム開発入門』の文献を参考に、企業経営と情報システムの関係や必要性、いくつかのモデル、システム分析の方法、情報システム開発のプロセスなどをご指導していただきました。また、経営環境が日々刻々と変化していることと、その変化と同時にITの変革も企業経営に大きく影響することも学び、そのために求められる人材や対応力、情報システムの必要性などを学びました。学習内容に合わせ、現在の業務内容を例にモデルを作成したことは、学習内容をより深く理解することができたと思います。

審査課に在籍していた4年間は、システムを使う側の仕事だったので、与えられたシステムの操作方法を教えてもらい日々の業務をこなしていましたが、今回システム分析の方法などを学び、仕事の流れを再認識しながら仕事の流れをスムーズにする方法を考えることができたのはとてもよい機会だったと思います。

また、竹並教授の4年生ゼミに参加させていただき、卒業論文のための研究、学習内容の発表を聞かせていただきました。卒業論文の発表内容には、今まで知らなかったことが多くあり、とても勉強になったと同時に、学生の研究に対する学習意識がとても高く驚かされました。

この半年間で学んだ内容がすべて業務に結びつくとは限りませんが、これから仕事をしていく上で何か問題に直面した時に今回学んだ知識を基に、選択肢が増えていくと思います。半年間という短い期間でしたが、多くのことを学び知識を増やすことができました。ここで学んだことを無駄にしないよう、これからの業務を進めていき少しでも多くの仕事に携われればと思います。

このような機会を与えていただきとても感謝しています。ありがとうございました。

「ビジネスメッセ」に出展

画像による行き先掲示　新システムを開発し披露

「新潟国際ビジネスメッセ２００９」が11月５、６日の両日、新潟市産業振興センターで開催されました。本学からは情報システム学科の中田豊久講師と同学科４年生３名が出展参加しました。

「新潟国際ビジネスメッセ」では、ビジネスの拡大につながる最新の技術やサービスが、さまざまな企業や大学から展示されます。

本学では、「画像による行き先掲示板システム」の展示を行いました。

これは「画像」を使って人の「行き先」を掲示するシステムです。そもそも行き先掲示板とは、自分の行き先を伝える掲示板のことであり、従来では、よく紙とマグネットなどを使って、どこかに行く前にマグネットを移動する、ということが行われてきました。

しかしこれでは、行った先での予定外の行動や、マグネットを移動し忘れてしまうことに対応できません。

そこで、「行った先」でその場所が分かるような写真を撮り、それが自動的に掲示板に表示されるシステムを開発しました。このシステムの特徴は、高価な屋内における測位機器を用いることなく、人の位置を知らせることです。測位を、機器ではなく「人」が行う、ともいえます。

このようなシステムを今回のビジネスメッセで展示し、多くの来場者に興味を持っていただきました。

（情報システム学科　講師　中田豊久）

ホンモノの研究が生むホンモノの教育

海外研修を終えて

カリフォルニア大学バークレー校の講義を受講して

情報文化学科・教授　佐々木　寛

1年の海外研修中、私はいくつかの「挑戦」を自分に課した。そのうちの一つが、アメリカの大学で開かれる通常の講義を、現地の学生と一緒に受講するということである。講義で使われる英語を習得してみたかったこともあるが、アメリカの学生や教育の実態を肌で感じてみたいということもあった。私を招いてくださった、カリフォルニア大学バークレー校のアンドリュー・E・バーシェイ教授は、私の提案に快く同意してくださり、私は「客員教授」ではなく、まさに普通の「学生」として、「20世紀の日本」と「戦後日本史」の二つの講義に参加することになった。いつも「教える側」にいた自分が、若い学生たちと机を並べ、懸命にノートを取るのは、本当に新鮮で愉快な経験だった。

何より、若返ったというか、学問を志した当初の知的興奮が甦ってきた。そう、講義は常に知的な興奮に満ちていた。朗々と語られる、歴史の下半身をえぐるような見事な分析に惹き込まれ、また自分が生まれ育った国の歴史が、目の前でまるで生きたまま解剖されていくような展開に眩暈すら覚えた。

とはいっても、もちろんアメリカの学生も日本の学生と変わりはない。遅刻する学生もいるし、授業が始まる前は、騒然としている。見たところ、学問云々というより、単位稼ぎに必死な学生がほとんどである。しかし、いったん教師が語り始めると、教室は水を打ったように静かになる。「いったい何割の学生がちゃんと内容を理解できているだろう」と思うような高度な内容に差しかかっても、学生の眼は、教師の発する「何か」に鋭く注ぎ込まれたままである。そしてそれは、決して教師の話し方が分かりやすいだとか、黒板の字がきれいだとか、配付プリントがあるとかないとか、そんなことによるものではなさそうだ。学生たちを惹きつける、バーシェイ教授が発するものが何であるのか、それに気が付くことは、実はそれほど難しいことではなかった。

その講義が放つ迫力は、いわば、まさに最先端の研究者のみが発することのできる迫力である。学問の最先端で苦闘し、探求し続けている知的現場の緊張と雰囲気が、それを聴くものにひしひしと伝わってくるのである。たとえときには「難しすぎる」内容であっても、学生にとってそれは紛れもないホンモノの「何か」であって、今聴かなければいけない「何か」であるということが分かる。「よい講義」が何であるかというのはさまざまな見方があるにちがいない。しかし私は、ホンモノの研究者だけが為すことのできる「よい講義」が何であるのかについて、目の当たりにした気がする。

今、日本では経済や政治のみならず、教育までもアメリカに倣えとばかりに、ただひたすら授業時間数を増やしたり、表層的な基準の「外部評価」で教職員の事務仕事を増やすことが教育研究の向上をもたらすという迷信がまかり通っている。「質より量」の発想である。しかしそれは、アメリカの大学がなぜ世界水準の教育研究を誇ることができるのかという本当の秘密を読み誤っていると思う。大学という場所で真に社会や学生が求めるものが何であるのか、私たち日本の大学人は今、少し立ち止まって考えるべき時期かもしれない。

リップマン・ルームから見下ろした大学キャンパス。右に建つのは大学のシンボル、セイザー・タワー。これまでに既に40人以上のノーベル賞受賞者を輩出している

最終講義のご案内

今春、本学に多大な功績を残されました情報システム学科の大山毅先生と、大竹康夫先生が定年を迎えられます。

大山先生は平成6年から、大竹先生は同14年から教壇に立たれ多くの学生を社会に送り出してきました。

最終講義を、次の日程で開催します。どなたでも聴講いただけますので、当日直接会場にお越しください。多数の方のご来校をお待ちしています。

■2月6日（土曜日）
■本校（みずき野キャンパス）
140教室

午後1時～2時
大竹 康夫 先生
「SEとして教育者として」

午後2時10分～3時10分
大山 毅 先生
「人間工学・研究と実験」

「科学の祭典」に出展

楽しく「視覚の不思議」体験
人気の本学ブースに驚きの声

「青少年のための科学の祭典2009」が11月21、22日の両日に三条市の県央地域地場産業振興センターで開催されました。本学からは情報システム学科の二瀬由理准教授と同学科3年生3名が参加し「視覚の不思議」などを体験してもらいました。

このイベントは、未来を担う青少年のために、実験や工作などの実体験の場を提供し、科学の面白さ、楽しさを実感してもらうために行われている体験型イベントで、今年で18回目を迎えています。今年度の新潟大会では、県内の高校、大学、企業などが出展した31のブースと、3種類のステージショーが行われました。

あいにくの荒天にもかかわらず、両日合わせて約7800人の方々が来場され、各ブースからは常時、子どもたちの驚きの声や、楽しそうな笑い声が聞こえてきていました。

本学が出展したブースは「人間の視覚の不思議な世界」というタイトル。子どもたちに、普段何気なく見ているこの世界が、実は実際の物理世界と違う場合があることに気付いてもらい、人間の視知覚の面白さを知ってもらうことを目的に、いくつかの体験を用意しました。例えば、さまざまな幾何学的錯視を体感した上で、実際に自分たちで書いてもらったり、実際には色が付いていないコマを回すと色が見えるという主観色を体験してもらったりしました。さらには補色の関係をマッカロー効果（方位随伴性残効）の体験を通して理解してもらいました。

（情報システム学科　准教授　二瀬由理）

卒論中間発表会を終えて

勉学の成果を披露

実行委員会が見事な運営

情報文化学科恒例の卒業論文中間発表会が、10月31日（土）に新潟中央キャンパスで開催されました。

この中間発表の特徴は、3年生のゼミから選出された学生が実行委員会を立ち上げて、ポスターやプログラム作りから当日の会場設営、そして座長・計時係りに至るまでさまざまな準備を行うことです。今年は28名の3年生委員がこの任に当たりました。委員にとっては、特に当日の座長は重責です。しかし各委員たちは、驚くほどきっちりと自分に与えられた仕事をこなしていきます。日ごろのゼミの成果が表れていると感じました。

4年生にとっては、4年間の自身の勉学の成果を、自分の所属するゼミ以外の学生や教員に問う唯一の機会でもあります。与えられた発表時間は一人約10分。発表後には質疑応答の時間がさらに10分間。学生や教員からは多様な質問や意見が飛び交います。首尾よく答える学生もいれば、答えに窮して言葉の出てこなくなる学生もいます。でもそれでいいのです。なぜ質問に答えられなかったのか。これを考えることが次のステップへつながります。中間発表の目的はまさにここにあります。

本誌が出るころにはすでに卒論の提出は済み、最後の難関である2月の口頭試問へ向けての準備が始まっていることでしょう。3年生にとってはそろそろ卒論を意識し始める時期です。卒論中間発表会は、保護者・一般の方の参加も自由です。どうぞこの機会に学生たちの勉学の成果をお聴きになられたらいかがでしょうか。

世話役：澤口晋一（情報文化学科・教授）

“就活”を支援

企業懇談会を開催

情報交換と懇親深める

ゲスト講師に元NHK松平定知氏

本学学生の就職や産学連携などでご支援いただいている県内外の企業関係者を招く、恒例の企業懇談会が昨年11月18日、新潟市内のANAクラウンプラザホテル新潟で開催されました。14回目を数えた今回は235社から320人からご参加いただき、教職員らと情報交換と懇親を深めました。

ゲスト講師は元NHKキャスターの松平定知氏。「“そのとき歴史が動いた”の現場から」と題して、直江兼続や藤堂高虎にみる先見力、直言力、独自の技術の大切さについて講演され、新潟に縁の深い人物の生きざまに、参加者は熱心に聞き入っていました。

開会にあたって平山学長は本学の教育方針や研究活動を説明、「自ら判断し行動できる人材の育成を目指す」とあいさつ。また第2部の懇親会では、武藤理事長、竹並教授（就職指導委員長）が、日ごろのご協力に感謝してあいさつを行いました。

来賓代表の日銀新潟支店長・栗原達司氏のご発声で懇親会となり、参加者と本学教員らが、活発な情報交換を行い交流を深めました。

235社から320人参加

4年次生への緊急対策について

県外の「就活」に交通費を補助

最後まであきらめず内定を勝ち取ろう

世界同時不況の影響を受け、現4年次生にも就職未内定者が少なくありません。最後まであきらめず、内定を勝ち取るために、県内にこだわらず県外での「就活」も積極的に進められるよう、新幹線や高速バスなどの交通費用を全額補助することを決めました。希望者は就職課に申し込んでください。

また、県主催による、合同企業説明会が1月19日（火）に新潟市の「ときメッセ」で再度開催されます。未内定者は大いに活用してください。

湧源（ゆうげん）

編集後記に代えて

広報委員長　澤口　晋一

先日、研究会出席のため東京にある出身大学に出向いた。その日はたまたまホームカミングデー（同窓会）の日に当たっており、久しぶりに母校を訪れたであろう老若男女で、狭いキャンパスは大賑わいだった。その中でひときわ人だかりのしている所がある。行ってみると大学グッズの販売コーナーだった。なんとまあいろいろさまざま並んでいることか。何十種類もの文房具やキーホルダー、ペナント、旗、マグカップ、各種グラス、Tシャツ、トレーナー、ネクタイなど定番グッズはもちろん、ぬいぐるみ、石鹸（せっけん）にバスタオル、暖簾（のれん）から酒、和洋菓子…米まである。すべてのグッズに大学名とロゴマークが刻まれているのはもちろんである。

こうしたグッズは、私が学生のころにはノートや衣類など安価な実用品が中心だったことを思うと、大学グッズの持つ意味がこの10～20年の間に根本から変わったのである。大学グッズは今や、大学のブランディング化を進め、同時に学生の大学への帰属意識を高めるための重要な戦略品として欠かせない存在になっているのである。

実は、県内の各大学からも、ユニークなオリジナルグッズがいろいろと出始めている。こうした動きを察知し、広報委員会でも新しいグッズ開発についての議論をこれまでに何度か行ってきた。しかし、全体に消極的な姿勢が目立ち、いまだ実現には至っていない。小さな大学だからこそ、新しい大学だからこそ、こうしたことへの積極的な取り組みが、むしろ大手の大学よりも必要なのだという認識を、大学全体で共有したいものである。

本学においても、魅力あるグッズの登場を期待したい。

厳しい状況下　本番に備え

きめ細かな個別指導に力
「合説」バスツアーも企画

学生皆さんの卒業後の進路については、個々の適性や希望を重視した個別指導を行い、教職員一体となって、きめ細かな指導をしています。特にこれから開催される、「学内合同企業説明会」「就職体験講座」は、就活の本格化に向けて大学が最も力を入れている取り組みです。必ず3年次生の全員が参加されるよう期待しております。

また、3月には、東京での「合説」(合同説明会)を希望する学生を対象に、バスツアーも検討していますので、ガイダンスなどでの連絡事項に注意してください。

学内合同企業説明会を開催します

200社の担当者が来校
面接対策も親切に助言

2月 3日・4日 体育館

3年次生を対象とした、恒例の「学内合説」が2月3日(水)、4日(木)の2日間にわたって体育館で開催されます。

これは、毎年この時期に、約200社の人事担当者が、3年次生に企業内容や採用状況等について詳しく説明したり、学生からのさまざまな質問に応えたりしていただく直接の機会として開催されてきました。県内最大規模の、この「合説」は3年次生にとっては、いよいよ本番に向けた「就活」の一大イベントです。

特に面接試験は誰もが苦戦します。企業の担当者の皆さんは、面接対策についても親切・丁寧にこたえてくれます。ミスや間違いを恥ずかしいと思うかも知れませんが、知らないことを教えていただく場ですから、失敗を恐れず、これからの「就活」に向けた、企業研究、自己成長の場として積極的に参加してください。

模擬面接を実施します

厳しさを払拭する講座に
3年次生は全員参加を

2月 6日・7日

いよいよ本格化する「就活」に備え、2月6日(土)、7日(日)の両日には就職模擬面接講座が開催されます。ここでは、今日までの授業「キャリア開発」や「ガイダンス」で学んだことを、模擬面接の中で実践してみます。また、グループディスカッションを通じて自己理解、他者理解を深め、自分の中での就職に対する考えを探ってもらうことを目的としています。さらに、多くのファシリテーター(講師)や卒業生、4年次生の協力をいただき、社会に求められる大学生像を検証します。

この講座では、就職活動に対するつらくて、厳しいという思いを払拭してもらい、積極的な「就活」が実行できるよう、スタッフ一同受講生の立場に立って、力強く応援をしてまいります。3年次生全員の参加を期待しております。

平成22年度 入学者選抜試験概要(要約一覧)

入試区分		募集人員		出願期間	試験日	試験地	試験実施教科・科目	合格者発表日	入学手続き期間
一般入学試験	前期	情報文化学科 35	95	22年 1月 5日(火)〜1月21日(木)	22年 2月 2日(火)	新潟 長岡 上越	・国　語：国語総合(現代文)・現代文 ・数　学：数学I・数学II(数学IIは、微分・積分を除く。) ・外国語：英語I・英語II 上記3教科の中から2教科を試験場で選択	22年 2月 6日(土)	22年 2月 6日(土)〜2月16日(火)
		情報システム学科 60							
	大学入試センター試験利用	情報文化学科 15	35	22年 1月29日(金)〜2月15日(月)	22年 1月16日(土)、17日(日)の大学入試センター試験を受験していること		学科試験を課さず、平成22年度の大学入試センター試験の成績で判定、全教科の中から2教科2科目選択 配点：各教科100点(3科目以上受験した場合は高得点の2教科2科目を合否判定に使用。国語は近代以降の文章のみ利用。外国語(英語)はリスニングを含む。)	22年 2月20日(土)	22年 2月20日(土)〜3月 9日(火)
		情報システム学科 20							
	後期	情報文化学科 10	25	22年 2月15日(月)〜3月 2日(火)	22年 3月 9日(火)	新潟	・国　語：国語総合(現代文)・現代文 ・数　学：数学I・数学II(数学IIは、微分・積分を除く。) ・外国語：英語I・英語II 上記3教科の中から2教科を試験場で選択	22年 3月12日(金)	22年 3月12日(金)〜3月23日(火)
		情報システム学科 15							

本学独自の奨学金制度(給付)

- ●学費特別給付奨学金(前期入試受験者対象)授業料全額又は1/2
- ●表彰奨学金(2〜4年生対象)10万円〜30万円
- ●海外派遣留学・海外研修奨学金(2年生対象)15万円〜23万円
- ●資格取得奨励奨学金(全学年対象)I種5万円、II種2万円
- ●学費臨時給付奨学金(全学年対象)授業料・施設設備費の当該期分全額又は1/2

◎入試と奨学金の詳細については事務局までお問い合わせください。　TEL025-239-3111　E-mail gakumu@nuis.ac.jp

私の研究テーマ

ロシアの体制転換と日本外交

情報文化学科・教授　小澤 治子

私が国際政治に関心を持ったのは、小学校高学年のころだったと思う。1960年代後半、ベトナム戦争から手を引かず、北爆を続けるアメリカ大統領ジョンソンに眠れないほど怒りを覚え、68年大統領選挙の最中、凶弾に倒れたロバート・ケネディに涙したあのころ。時は米ソの冷戦真っただ中。この冷戦の仕組みを明らかにし、いつかはこの構造を何とかしてやろうと大きな志を抱いたのでした。

80年代に入り、ソ連の指導者は次々に変わりました。長期政権のブレジネフが亡くなり、アンドロポフ、チェルネンコ。そして85年に登場したゴルバチョフ。このゴルバチョフ、若いだけでそれまでと大して変わりはないと高をくくっていた大方の予想を裏切り、次々にすごい事が起こりました。米ソの核軍縮条約締結。ベルリンの壁の崩壊と続く東欧の体制転換。冷戦構造の崩壊とソ連自身の解体。20世紀末に起こった国際政治の枠組みの大きな変容をこの目で見ることができたことは、幸せだったと感じます。

91年12月、解体したソ連の国際的地位を継承したのが、今日のロシアです。20世紀にロシアでは世界を揺るがす二度の大きな体制転換が起こりました。17年のロシア革命により帝政から社会主義体制へ。そして80年代後半から90年代初めのペレストロイカ（改革）の結果、社会主義から「市場経済と民主主義を目指す体制」へと変容を遂げました。

国際政治の舞台では今日、ロシアは政治面、経済面、安全保障面などで国際社会との協力とそれへの統合を模索しつつあります。

しかし、これだけ大きなロシアの変化について、どれだけの人々（特に日本人）が気付いているのでしょうか。日本外交は二度のロシアの体制転換にあまりにも鈍感だったのではないでしょうか。この問題について、微力ながら私なりに発信していきたいと考えます。

2009年はベルリンの壁崩壊から20年の年でした。1989年に生まれ、二十歳を迎えたゼミ学生とドイツ統一の問題を議論していると、何ともいえない感慨を覚えます。

歴史に学び、歴史をつくる。私自身もそうありたいし、また学生の皆さんにもそうであってほしいと願っています。

オブジェクト指向モデル

情報システム学科・准教授　石井 忠夫

現代の論理学は19世紀中ごろに現れたゴットローブ・フレーゲにより築かれたといえます。フレーゲは数学における算術の基礎を論理学に求め、「概念記法」と呼ばれる革新的な形式言語を導入して、算術の中の概念や定理がこの言語を用いた体系内で推論の連鎖として導出可能であることを示しました。この記法により、対象としている「もの」の性質やそれらの間の関係は対象変数を用いて関数的に表せ、それまでの主語－述語構造からなる命題論理の表現力をより分析的に高めました。また、思想（判断可能な内容）を表すのが文であり、思想の正しさ（真理値）は文中の名前（固有名や関数名）の意味（指示対象）や意味の与えられ方（意義）により定まるとし、文の構造を思想の構造の像と見なしました。

19世紀後半に現れたルートウィヒ・ウィトゲンシュタインは「論理哲学論考（Tractatus）」の中で、フレーゲの研究を批判的に受け継ぎ「文の写像理論」を展開しました。この理論では固有名は意味として対象（事物）を指示し、この対象が相互に結合した配列を原子的事態、また原子的事態の集まりを状況と呼びました。このとき、「現実世界」とは成立している事態（正の事実）と成立していない事態（負の事実）の集まりであり、さらに成立可能な事態の集まりである可能的世界を加えた全体が「世界」を構成しているとしました。言語において、固有名からつくられる命題が対象相互の結合配列を正しく写像するときには事態の記述となり、正しい命題は成立している事態（正の事実）を表しています。よって任意の言語が世界の事実を述べ得るには、言語の文の構造と世界の事実の間に何か共通の表現形式が共有される必要があります。

この理論は数学におけるモデル理論の構築に影響を与えましたが、またプログラムの仕様記述のためのモデル理論とも見なせます。特に対象とそれらの結合配列としての事態の考えは、今日における「オブジェクト指向モデル」に現れるクラスとその関連に呼応しています。より厳密には、対象の構造を記述するのが「型」であり、そのサブセットとして対象の振る舞いを記述する「クラス」の概念があります。これら各概念の相違を検討し、オブジェクト指向モデルの形式言語を導入し、さらに一般化するのが私の研究テーマです。

バナンスの教育研究拠点」(慶應義塾大学三田キャンパス)

大野富彦(情報システム学科・准教授)

・報告書執筆　(2009)「アビーム・グローバル・ディベロップメント・センター西安」『西安オフショアリング企業調査報告書』中央大学政策文化総合研究所プロジェクト：オフショアリングビジネスの展開(50-54頁)
・研修講師　(2009年8月3,4日)産能マネジメントスクール主催「ケースメソッドによる経営戦略策定セミナー」

越智敏夫(情報文化学科・教授)

・シンポジウム司会　(2009年8月15日)市民文化フォーラム「市民による社会変革」発言者：ノーマ・フィールド、小森陽一、広田照幸、市野川容孝、内海愛子(日本教育会館)
・書評執筆　(共同通信2009年10月配信)ベネディクト・アンダーソン著『ヤシガラ椀の外へ』ＮＴＴ出版、『新潟日報』ほか各紙掲載。
・解説記事執筆　「総選挙にあらわれた民意」『新潟日報』2009年8月31日朝刊
・解説記事執筆　「総選挙解説」『新潟WEEK!』2009年8月7日号, 8月21日号
・エッセイ連載　「Close Up」『新潟WEEK!』2009年10月16日号～

熊谷　卓(情報文化学科・准教授)

・2009年10月27日NHK国際放送番組"News Line"に出演、米国の対テロ戦争の行方(グアンタナモ収容所の閉鎖)について解説

小林元裕(情報文化学科・准教授)

・講演　(2009年9月27日)「黒竜江と近代日本」新潟県国際交流協会主催　2009年度国際理解講座「アジアをもっと知ろう！」(朱鷺メッセ)

佐々木　寛(情報文化学科・教授)

・新聞記事執筆　「カリフォルニアの環境政策―先進的取り組み発信」『新潟日報』連載「バークレー便り」③　2009年7月1日朝刊
・新聞記事執筆　「地域と世界に開かれた大学―世界水準の研究生む『新潟日報』連載「バークレー便り」④　2009年7月28日朝刊
・新聞記事執筆　「サンフランシスコ　夏の風物詩―多様性愛する２祭典『新潟日報』連載「バークレー便り」⑤　2009年8月7日朝刊
・新聞記事執筆　「『政権交代』後の課題―市民活動の持続必要」『新潟日報』連載「バークレー便り」⑥　2009年9月4日朝刊
・シンポジウムコーディネーター　(2009年8月19日)「市民からの＜軍縮＞提案―核開発とミサイル防衛の悪循環を超えて」(万代市民会館)
・講演　(2009年9月4日)「オバマ政権下のアメリカで見たもの―『政権交代』後の市民政治を考える」(クロスパルにいがた)
・解説　(2009年11月7日)　アムネスティ・インターナショナル日本　スピーキング・ツアー2009新潟講演会「『対テロ戦争』とグアンタナモ収容所」(クロスパルにいがた)
・講演　(2009年11月26日)　新潟県平和センター10周年記念講演「『政権交代』後の平和問題」(新潟会館)
・司会　(2009年11月29日)日本平和学会 秋季研究集会 自由論題部会Ⅱ(立命館大学)

矢口裕子(情報文化学科・准教授)

・翻訳(共訳)　アナイス・ニン／ヘンリー・ミラー往復書簡「恋した、書いた」『水声通信』第31号（56-72頁）
・翻訳　冥王まさ子「現代日本女性のグリンプス」『水声通信』第31号(114-124頁)
・翻訳　アナイス・ニン『人工の冬』水声社(324頁)

吉田　博(情報システム学科・准教授)

・三条市優しい「まちなか」創造協議会委員(会長)　平成21年度地域ICT利活用モデル構築事業の一環として、昨年度運用を開始した「買い物御用聞サービス」の改善・強化、地域ポータルサイト(子育て、福祉コミュニティ、市民活動支援、農業支援）の構築を行う。

現代GPシンポジウムを開催

国際交流インストラクター事業(現代GP)シンポジウム「国際理解教育におけるワークショップの導入」が11月14日、新潟市のクロスパルにいがた4階映像ホールで開催されました。教育、行政、マスコミ、国際交流団体など多くの関係者と本学の学生インストラクターや卒業生多数が参加、同事業の成果と課題を話し合いました。

本学では地域社会の国際化推進を目的に、平成17年度から「国際交流インストラクター事業」に取り組んでいます。国際交流団体や教育機関と連携して育成・認証された学生を「国際交流インストラクター」として県内小中学校、高校に派遣しワークショップを行って国際理解教育を行っています。これまで60校以上で受講した児童・生徒は4000人を超えました。その実績が認められ19年度から文部科学省の大学改革推進等補助金の一つ「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」(現代GP)に採択されました。

国際交流インストラクター事業を評価

シンポジウムはまず基調講演として、長岡市国際交流センターの羽賀友信センター長から、「新潟に求められる国際理解」についてお話していただきました。続いて本学の国際交流インストラクターの学生が、3例の国際理解講座のワークショップを紹介しました。その内容を上越教育大学の釜田聡教授に講評していただきました。

続いてパネルディスカッションが行われ、新潟県教育庁高等学校教育課・橋本敏郎指導主事、新潟市教育委員会学校支援課・高橋直彦副参事、同市立巻南小学校・井口昭夫教諭、同市立二葉中学校・鈴木佐榮子教諭、同市立万代高等学校・平井望教諭、新潟日報社読者ふれあい部・渡辺英美子部長に、本事業の成果と今後の課題についてお話していただきました。

質疑応答では、フロアの参加者からも貴重なご提案があり、また学生インストラクターも真剣にノートを取りながら積極的に意見交換していました。

より充実したワークショップの展開へ

今回のシンポジウムは同事業のこれまでの成果を公開し、多くのご意見、批判、助言などをいただき課題を明らかにして、同事業のいっそうの充実を図るもので、文科省の補助事業の一環として開催されました。現代GPとしての事業は今年3月で終了しますが、国際交流インストラクターは今回のシンポで明らかになった課題に取り組み、来年度以降も地域と連携した活動を展開していきます。

現代GP研究推進員　宮下　豊

お薦めBOOK

本学図書館のWEBサイトに個性あふれる教員たちの紹介文が載っています。アクセスしてみてください。
http://www.niis.ac.jp/ic/library/book/book.htm

『社会学の理論でとく現代のしくみ』

吉田民人編
新曜社(1991年)

皆さん、日本の伝統的な結婚式というと、どんなものを思い浮かべますか。神主さんが祝詞(のりと)をあげて、三々九度、その後、披露宴といったスタイルを思い浮かべるかもしれません。しかし、これらは近代になって"新たにつくられた伝統"なのです。こういった日常の出来事を分かりやすく解き明かしてくれるのが、本書です。

編者の吉田先生は、東京大学を定年で退官されたのち、私が通う中央大学に移られてきました。吉田先生は、ご自身が研究している最新の情報学の理論を大変分かりやすく教えてくださいました。この本もそんな先生の方針が反映されていて、大変読みやすいばかりでなく、社会学の理論で深く私たちの日常の暮らしの出来事(家族らしさ・町内会・人間関係・自己表現としてのロックなど)を浮き彫りにしてくれます。今この機会に読み返してみると、30年近くたった今でも得ることが大きい、いやむしろ今だから分かることもたくさんあります。

吉田民人先生は10月27日、おだやかに永眠されたそうです。ご冥福をお祈り致します。

(情報システム学科准教授　小宮山 智志)

教員の活動（2009年下半期・本人申告による）

1）研究論文・図書

石川　洋(情報システム学科・准教授)
・(2009)「An Approach for Refactoring using ESC/Java2 －A Simple Case Study－」Hamido Fujita and Vladimir Marik(eds.)『NEW TRENDS IN SOFTWARE METHODOLOGIES, TOOLS AND TECHNIQUES』IOS Press(12/624)

臼井陽一郎(情報文化学科・教授)
・(2009)「EUの環境ガバナンスとデモクラシー」庄司克宏編著『EU環境法』第8章　慶應義塾大学出版会(37：408頁)

區　建英(情報文化学科・教授)
・(2009)『自由と国民　厳復の模索』東京大学出版会(456頁)

大野富彦(情報システム学科・准教授)
・(2009)「企業経営における企業家像と企業家養成のフレームワーク―Penrose的企業家とHarper的企業家の関連性および『日常の理論』からの検討―」『経営情報学会誌』第18巻・第3号(93-106頁)

熊谷　卓(情報文化学科・准教授)
・(2009)「テロリズムと人権―テロ被疑者の処遇を素材として―」『国際法外交雑誌』第108巻2号

佐々木　寛(情報文化学科・教授)
・(2009)「世界のリアリティ、平和学のリアリティ―戦争と安全保障論の現在」君島東彦編『平和学を学ぶ人のために』世界思想社(21：408頁)
・(2009)「現代の平和主義」千葉眞編『平和の政治思想史』おうふう出版(32：379頁)

アレクサンドル・プラーソル(情報文化学科・教授)
・(2009)『日本時代の相貌』改訂増補版　NATALIS PRESS(モスクワ)(416頁)

矢口裕子(情報文化学科・准教授)
・(2009)「想像の父を求めて―『インセスト』論への前奏曲」『水声通信』第31号(142-155頁)

2）学会・研究報告

池田嘉郎(情報文化学科・講師)
・(2009年10月11日)「都市と対峙するボリシェヴィキ政権：公営事業、『寄生分子』と内務人民委員部、1921 - 28」ロシア史研究会大会(法政大学)

石川　洋(情報システム学科・准教授)
・(2009年7月7日)「A Simple Case Study of Program Verification with ESC/Java2」ITC-CSCC 2009(IEICE(Japan), IEEK(Korea), and ECTI(Thailand))

大野富彦(情報システム学科・准教授)
・(2009年7月7日)「企業家の知識の成長に関する研究」新潟・経営研究会(新潟大学)

高橋正樹(情報文化学科・教授)
・(2009年7月4日)「長期変動期にあるタイ政治―グローバリゼーションと『平等化』政治―」日本タイ学会 第11回研究大会(京都大学東南アジア研究所)

竹並輝之(情報システム学科・教授)
・(2009年7月24日)「情報分野ＩＳ領域のＪＡＢＥＥ認定とその課題」電子情報通信学会技術者教育と優良実践研究会(機会振興会館)

中田豊久(情報システム学科・講師)
・(2009年9月18日)「画像による行き先掲示板システム」グループウェアとネットワークサービス・ワークショップ2009予稿集(情報処理学会 GN研究会)(75-80頁) ベストプレゼンテーション賞

藤瀬武彦(情報システム学科・教授)
・(2009年8月26日)「女子学生の痩せ願望には男性の痩せ好みが影響している」日本体育学会 第60回記念大会(広島大学東広島キャンパス)

3）その他

池田嘉郎(情報文化学科・講師)
・翻訳　(2009)ミヒャエル・シュテュルマー著『プーチンと甦るロシア』白水社(388頁)
・国際ワークショップ司会　(2009年11月30日)「蒋介石と高田、そして日中ソ関係」(上越教育大学)

臼井陽一郎(情報文化学科・教授)
・国際シンポジウムのチェアおよびコメンテーター　(2009年07月15日)「The EU and the Global Economic Governance」セッション1「Europe and the Management of Globalization」（報告：ソフィー・メイニエ（プリンストン大学ウッドロー・ウィルソン・スクール研究員）、主催：慶應ジャン・モネEU研究センター、共催：一橋大学・慶應義塾大学戦略的大学連携支援事業および慶應義塾大学GCOE「市民社会におけるガ

卒業生の便り

情報文化学科2006年度卒業　**木村　紘子**

毎日がちょっとした国際交流

新潟空港で警備と接客業務
安心・安全のサービス提供

露中韓、英語…NUISの選択言語のような国の風を感じながら、新潟空港で航空保安検査員として従事し3年半がたちました。新潟綜合警備保障（株）に入社し、今、私は安心と安全という目に見えないサービスの提供を行っています。普段はテロや危険物輸送を防止するボディーチェックや手荷物検査を行い、案内カウンターを担当することもあります。

新潟空港はロシア人と中国人が多く、耳で覚えたロシア語、中国語を使うことも。毎日がちょっとした国際交流です。また、企業社会貢献活動として、小学校への出張防犯教室の講師も担当させていただいており、充実した日々を送っています。

まさか警備員になるなんて…そう思っていました。CEP、留学、国際交流インストラクター…大学で経験したことを並べると、一見全く関係なさそうですが、実は全て今の仕事にリンクしています。さまざまな人との出会いや英語を通じた会話などは空港での接客業務に、また人に何かを伝えるという経験は、新入社員教育や子どもたちへの防犯教室に役立っています。

「コミュニケーション能力の向上」よく耳にする言葉ですが、今、どこにいっても対・人です。自発的な行動、意見を述べる、議論する、友達以外の人と会話をする…そういった機会はこれから増えていくでしょう。いろいろな経験をしてその力を蓄えておくことをおすすめします。それは授業であり、ゼミであり、普段の生活でもできることです。それから、今しかできないこと、今だからできることを考え、少しでも迷ったらチャレンジしてみてください。自分の殻を破ってください。

私は昨春、英語にもっと触れたくてカナダへ一人ミニ留学をしてきました。全ては自分の為に。全ての経験が考え方を確立し、現在の自分をつくります。自分のモットーを確立しておくと今後きっと迷ったり悩んだりしたときに役に立つと思います。

皆さんはどんな大学生活を送っていますか？卒業したら何をしたいですか？ただなんとなく過ごす毎日なんてもったいないです。ぜひ大学生活の一日一日を楽しんでくださいね。

本学と新潟日報の連携公開講座

手塚治虫漫画と浮世絵

長男・眞氏が魅力を分析紹介

ヴィジュアリストの手塚眞さんを迎えて、本学と新潟日報社の連携講座が11月14日、新潟中央キャンパスで開催されました。

手塚さんは漫画家の故手塚治虫さんの長男で「手塚治虫と日本のメディア・アート」と題し、父の作品と江戸時代の浮世絵の共通点を指摘しながら「鉄腕アトム」や「ジャングル大帝」などの代表作をスライドで紹介しました。

立体感あふれる絵、単純な線と誇張による分かりやすい表現が手塚漫画の魅力であり、「北斎漫画」に通じるところがあると指摘し、さらに江戸浮世絵を後世に受け継いで来たからこそ日本の漫画が世界に誇れる作品を生んできた、などと熱く語りました。

紅翔祭を終えて

実行委員長・情報文化学科2年　**板垣　拓也**

秋晴れに恵まれ、多彩なイベント
より地域に根ざした運営に努力

第16回紅翔祭が10月24・25日、本校（みずき野キャンパス）でにぎやかに開催されました。両日とも好天に恵まれ心配されていた風も強くはなく、空高く素晴らしい秋空。このような天候は実に5年ぶりだそうです。

今年度はメインイベントとして、音楽ライブを開催いたしました。より地域に根ざしたイベントということで、新潟市出身のアーティストである「ひなた」に来ていただきました。当日はファンの方々はもちろん、幅広い年齢層の方々にご来場いただき、会場の体育館は大盛況となりました。

また恒例の、父母会とみずき会（同窓会）のご後援による文化講演会には、NHK大相撲解説者の舞の海秀平さんをお招きいたしました。演題は「可能性への挑戦」。ご自身の関取時代の厳しい国技の勝負の世界での経験や、現在のスポーツキャスターという仕事の裏話も披露してユーモアたっぷりのお話でした。笑いを散りばめ緩急を付け、ワザ師らしい巧みな話術で体育館いっぱいのご来場の皆さまの心を終始つかんで離さず、大変有意義な講演会となりました。

その他にも人気の模擬店やゼミ・課外活動の発表展示、みずき会による大学周辺清掃クリーンアップ大作戦と就活喫茶などさまざまな企画が催されました。すべてが滞りなく進むようにと、準備段階から一致団結してきた実行委員会。お互いに助け合い協力することの素晴らしさをあらためて実感し、貴重な体験を積んでさらに成長することができました。来年度はもっともっと素晴らしい紅翔祭となることでしょう。たくさんの方々にご協力いただき、厚くお礼申しあげます。

にぎわった模擬店

ダンス部のパフォーマンス

卒業生が地域に恩返し（クリーンアップ大作戦）